

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」4月号 (通巻第23号)
2009年3月28日発行
[発行人] 赤塚祐一郎
[編集人] 大森美知子
[発行所] 株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

4

April Edition
2009, vol.23
Free of charge

この人の声が聴きたい◎4月 二宮清純さん (スポーツジャーナリスト)

ダークスーツと場末への深情けの関係



二宮清純はカッコいい。ブラウン管(じやないか、当世は)を通して拝顔していた二宮さんは、いつもバリツとしたダークスーツを着こなし、問題点を正面から射抜く発言をする、鋭利なビジネススマンと見紛うようなオーラを発散している。幕末なら維新の志士といった風貌もその魅力に二役買っているのだろう。語り口はクリアカットで合理的、つねに前向き、エネルギーが溢れてあいまいなところがない。スポーツジャーナリズムと無縁な人でも、二宮清純のファンだという人が多いのもうなずける。

ラジオ収録のスタジオに現れた二宮さんは、頭はぼさぼさ、スーツはよれよれ(と言っては語弊があるが)といった印象で、大きな黒い鞆を抱えており、これからどこか地方へ行商に行くビジネススマンといった風情であった。今やテレビ雑誌で引張りだこである。よほどお忙しいのであろう。この日は維新の志士というよりは、落魄した幕臣といった様子で疲れているのかなとも思ったが、いざ収録が始まるといつものカッコいい二宮清純に即座に切り替わった。いったい二宮清純の魅力とは何なのだろうか。たとえば、同じスポーツジャーナリズムに身をおく沢木耕太郎の場合ならば、私はその魅力のひとつで言うことができる。沢木の風貌からも、その文体からも漂ってくる気配は、濃厚なストイシズムである。必要なら「甘味な」と形容してもいい。それは読者に痺れるような緊張をもたらす。二宮さんの魅力は、それとは違う。もつとおおらかであり、もつと人間的だ。だが、それだけではかれの魅力が伝えたことにはならないだろう。

二宮さんと一時間ほど話をしているうちに、

私には漸くかれの魅力の中心がどこにあるのかをつきとめた気がしたのである。それは、たぶんかれのスポーツを語る立ち位置にある。一見冷静かつ合理的な分析者のように見えるが、かれの目線の先にあるのはアスリートの技術や試合の勝敗だけではない。勝負をめぐって繰り広げられる虚実相半ばする人間のドラマこそかれが見つめているものだ。「ベッカム、ペツカムってみんな騒いでいるけど、イギリス出身のスターは人間風車のビル・ロビンソンだぜ」と語る二宮さんのライターとしての出自は、意外にもプロレスにある。村松友視の『私、プロレスの味方です』や竹中芳の文体が好きだという二宮さんは、実は場末の空気を愛し、場末の文化を擁護する、「由緒正しい」バッシー(この名付け親も二宮さんらしい)なのである。

「場末の擁護者」とはどんな人間なのだろう。すぐに思い浮かぶのは場末の陋巷を徘徊した永井荷風である。徘徊の理由はただ、場末の空気を愛するという深情けに似た感情を抱き続けていたからだという他はない。なぜ、そんな感情を抱き続けるのか。おそらくそこそこ、人生の機微、驚き、裏切りと絶望の原型的な風景であり、かれの原点なのだ。ダークスーツに身を包んではいても、二宮清純の身体からは場末への深情けが香っている。

「子供のころ、プロレスの興行が和歌山の田舎までやってきた。ぼくはそれ見に行つて、馬場とあの魔王ザ・デストロイヤーがキャッチボールをしていたのを覗き見てしまった。」こう語る二宮清純は、そのときの目撃者の立ち位置をいまでも踏みしめている。

(ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(登録無料)にならると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りをお願いします!

<http://www.radiodays.jp>

〈対話・放談〉

人気メルマガでおなじみ「田中宇の国際ニュース解説」のエッセンスを毎月本人の肉声でお届けする『世界はこう読め!』人気コラムニスト小田嶋隆氏が世相を斬る『ラフイカルトーク』、大貫妙子さんや林立夫さんなど、ミュージシャンに話を伺う『Musical Talk』が好評。現在、第一回を無料ダウンロード中です。さらに、慶應丸の内ディキヤンパス(慶應MCC)が開催している『夕学』のなかから、各分野の第一線で活躍する研究者・経営者・文化人・ジャーナリスト等による講演を厳選してお届けしています。

〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた『声のエッセイ』コレクションが評判。また、『声の詩集』シリーズからは、女優馬丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聞く落語調『ゴリ』『外套』『鼻』も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源二百二十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に筆を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチャオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

オリンパスシンクする寄席

「日時」4月15日(金)午後7時開演(午後6時半開場)

「場所」お江戸日本橋亭

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

滝川鯉昇

(たきがわ りしやう)

八代目春風亭小柳枝に入門、昭和五二年、柳昇門下へ。平成二年真打昇進、十七年に改名。飄々としていながらも緻密な情景・心理的描写で、観客を江戸の異世界へ誘い込む。近年人気急上昇中の波に乗る噺家の一人。受賞歴多数。趣味は旅行。特技は食べられる野草の見分け方。



春風亭一之輔

(しゅんぷう いていいちのすけ)

春風亭一朝門下。平成一六年、二ツ目昇進。二ツ目ながら語り口に評判があり、会を開くと多くのファンが駆けつける。噺はもちろんのこと、素朴な話題から繰り広げられるマクラも面白く、目の離せない存在。平成二十年、第四回東西若手落語家コンペティション優勝。



明烏い話

連載第24回

本田久作



大学・短大入学者希望者が総定員に収まる大
学全入時代に突入したという話を聞いた時、
大学は落語界よりも遅れていると私は思った。
立川流を除く東京の落語界では真打制度は何
十年も前からすでに全入制を採り入れている。
ただし大学が全入時代に突入したのは少子化
のため入学者希望者が減少したためだが、落語
界が真打全入時代に入ったのは噺家の数が増
えすぎてしまったからである。世の中にはま
ったく相反する理由から同じ結果が導かれる
ことがあるから面白い。各大学はこの全入時
代に対してふた通りの対策をとった。一つは
入試の難度を下げ、門戸を広げる。もう一つ
は入試の難度を上げ、生徒の質の向上を狙う
というものだ。前者だと一時的には入学者の
数が増えるが、大学の質は下がるから、その
大学のブランドとしての値打ちは低くなる。
後者は大学のブランド価値は上がるが、その
評判を得る前に学生数が減り大学そのものが
廃校になる可能性もある。現行の真打制度は
前者を選択したものだ。
生志が真打に昇進した時他人事ながらめで
たいと私が思ったのは、生志が年功序列とは
無縁の真打制度を敷く立川流の噺家だからで

ある。成人式がめでたくないのは、誰もが
二十年生きていけば成人になれるからだ。今
の真打制度はもう耐久年数を過ぎてしていると私
は思う。

東京では羽織を着るのは二ツ目になってか
らだが、真打制度のない大阪では入門して間
もない噺家が羽織を着ても文句は言われない。
かつての鄧小平の経済政策をつくりの「羽織
を買う金のある奴から着ていったらええが
な」というやり方だ。これは非常にわかりや
すいシステムである。羽織はそちらに落ち
てはいない。買うか、貰うかしなければ手
に入らない。大阪では噺家が羽織を着ていると
いうのは、その噺家に羽織を買うだけの甲斐
性があったのか、もしくは羽織を買ってくれ
るお旦那がいるということの意味する。どちら
にしても噺家にとっては大事なことで、甲斐
性があるということはそれだけ落語で稼いで
いるということであり、お旦那がいるとい
うことはその噺家には熱狂的なファンがいて
いることを意味する。ことは羽織ばかりではな
く、着物全体にまで及ぶ。この理屈からい
けば、よい着物を着ている噺家ほどよい芸人
ということになるのだ。

芸人が羽織の有無や着物の質で芸のレベル
を云々されるようになるのは、一見邪道のよ
うに見えて実はそうではない。そうならば敢
えて羽織を着ないで芸だけで勝負をする噺家
も出てくるだろうし、腕はないくせに無理を
してでも綺麗を飾る芸人も現れるはずだ。だ
が、それでもこの方が年功序列による真打制
度よりはわかりやすい。少なくとも着ている
ものは目で見る事ができるが、その噺家が
真打か二ツ目かという区別は目で見てわか
らないし、困ったことに現行の真打制度では
芸を聞くとさらにわからなくなってしまうこ

とも多々ある。それならば金のかかったなり
をしている噺家の方がとりあえず偉いんだろ
うという漠然とした基準の方がはるかに明確
である。

着ている着物の良し悪しで噺家の腕前を予
想できるようになるのは(もちろんそういう
趨勢に反発して敢えて貧相な着物を着る噺家
が出てくる可能性もある上で)真打制度より
も客を楽しませるのは間違いない。少なくと
もそうならば、通ぶりたい客は着物に関する
知識まで求められることになる。時には客も
勉強した方がよい。またそうならば客は自然
と学ぶだろう。

●ほんた、まうさく

「一九〇〇年大阪府生、落語作家。二〇〇〇年の「仏の遊」が国立演芸場
日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞集の賞を毎年総ナメ
の業界巨匠の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞集優秀
作)、「儂の葬式」(按摩の夢)、「幽霊芝居」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讃大ばなし 貳拾参

柳亭市馬

き 『金明竹』

前座時代、初めて稽古をつけてもらった噺です。当時まだ
二ツ目だった、さん齋師匠から習いました。私の原点です。

式 『峠の茶屋』

そのもっとまえ、五、六歳のころ、先代の今輔師匠のこの噺
がとてもおもしろくて、落語に興味をもったきっかけとな
った噺です。

参 『らくだ』

やはり前座時代、高座のソデから見た師匠・五代目小さん
のこの噺が、ほんとうによかったことがいまでも強く印象
に残っています。

「声」を「器」をタンホロード！
今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

齒に衣着せぬ発言で世相を斬る痛快トーク

●「田中宇の世界は、こう読め！」

●「小田嶋隆のグラフィカルトーク」

ミュージシャン・ロングインタビュー

●「Music Talk 大貫妙子の世界」



温もりと味のある声のエッセイ／新鮮な詩の物語り

●「詩人の心の原風景（谷川俊太郎）」

●「水仙」瀬戸内寂聴（朗読・有馬稲子）

●「詩人の愛 金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか（鳥丸せつ）／正津勉」



本邦初！世界初！江戸弁で聴く落語「ゴリ」の魅力

●「外套」(I-III)

入船亭扇辰

●「鼻」(I-II)

柳家三三



面白くて物凄、当世落語家の斬がい。ばい三遊亭円丈、昔昔亭桃太郎、五街道雲助、古今亭志ん五、柳家小ゑん、瀧川鯉昇、柳家喜多八、柳亭市馬、桂平治、柳家喬太郎、三遊亭白鳥、三遊亭遊雀、入船亭扇辰、林家彦い、古今亭菊之丞……etc.

ラジオデイズサイトにようこそ！
※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。



行こけみちが

女流三ツ目の修行日乗②



柳亭こみち

「いただきます、って空中見て言うな。ある日、朝食をいただくとする私に師匠が言った。入門から三年経った頃。いつもお膳について「いただきます」と言っていたのに、初めて「俺の前に手をつけて言え」とその日は日舞の稽古日。朝の一件で涙を流したあと稽古場に着くと、先生に「お目々が赤いわ」とすぐ気づかれた。そんな時の私はまるで子供のよう。その言葉にどっと涙が溢れ出した。

先生は私にとって「サブテキスト」の役割も担う。人に話せない修業中特有の苦楽を知り、師匠の言葉の真意を絶妙に解説してくれるのだ。朝の出来事、連鎖して怒涛の如く言われた小言の話の聞き、先生は言った「あなたは感謝が足りない」。

師匠宅に何年もいて、お世話になることが当たり前になっていた。師匠が何十年も落語に命を捧げて稼いだお金で、毎日三度ご飯をいただける。斬家として生きるすべてを師匠に与えてもらっている。こんな有り難いことはない。それが私の「いただきます」には表れていなかった。基本的な心を忘れていた。だから師匠は怒ったのだ。と。

先生はそう話したあと、「あー面白い。人が苦労しているのは面白い。わはははは！」。

圧倒的な修業と修羅場を乗り越えてきた先生の前で、自分の大事件などほんの些細なことだった。笑い声に、気持ち軽くなった。そっだ。「いただきます」に、

精一杯心を込めよう。

●りゅうてい・いんぎ

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月三ツ目昇進。趣味は長門。特技は日本舞踊、吾妻流名取（宝妻春美）、落語協会野球部、チームR所風。



味な脇役・話芸のきまり文句

連載第23回

天気



松井高志

このコラムでは、主に広義の諺を取り扱っているが、諺の中には実用的なものもかなりあって、気象についての諺、昔の人々が経験から体得した簡単な天気予報フレーズ、すなわち「天気俚諺」などがその代表的な例である。たとえば、天気予報でよく引用される「春に三日の晴れなし」「朝焼けは雨、夕焼けは晴れ」といったもので、こういう諺だけを集めた本も出ている。

落語や講談のたぐいは農耕とは直接関係しない内容が多い都市芸能であるが、それでもしばしば、演者がこういう諺や気象についての形容を用いているのを耳にする。古典の世界では、こうした言い回しが「一般常識」であったわけだ。

雪は豊年の瑞

これなどは冬の演目、雪の降るシーンに

かなり頻発する。「赤穂義士伝」の討入の日、「夢金」「しじみ売り」などなど。「〽豊年の兆」「〽豊年の貢」「〽五穀の精」ともいう。意味は、雪が多く降った年は、豊作になるということ。

はだか虫の洗濯

これだけではピンと来ないかもしれないが、諺としてのフル・バージョンは「雪のあしたは裸虫の洗濯」。「裸虫」とは、貧乏で衣服の持ち合わせが少ない者のこと。雪の降った翌日は、晴天で暖かな日が多いから、ワードローブが心細い人でも安心して洗濯ができる、の意。用例「おう、雪がやんだと思つたら、馬鹿にいい天気になりやあがった。裸虫の洗濯とやら」（講談「鼠小僧次郎吉」）など。もっとポピュラーなものでは、

大風一過して光風霽月

などという言い回しが講談「三家三勇士」にある。これは、武芸ものによくある、火花の散るようなライバル関係がやがて無二の友情に変化する際のとえなどに使われる。この「大風」は「烈シク吹ク風」の意（大槻文彦「言海」）。

現在よく使われている「台風」という語は、一九六五年に「颶風」(二)旋風ノ極メテ大ク極メテ暴キモノ・同)の表記を改めたもの。「台風一過」はよく耳にする言葉なのだが、このためか辞書にはあまり載っていないのだ。この場合少しニュアンスが違うのかも知れない。

●まひ・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く」話芸のきまり文句（平凡社新書）、「フンドク」難読漢字自習帳（バジリコ）「江戸に学ぶビジネスの極意」(アスペクト)など。「話芸」きまり文句」辞典」サイトは<http://wagaidon.coopdoginry.com/>

オリンパス シンクろ寄席 三遊亭遊雀独演会

【会場】お江戸日本橋亭「吉越」2800円（前売2500円）
【時間】午後7時開演（午後6時半開場）
●5月18日◎

二遊亭遊雀・タスと鈴々舎馬るこ

※予約申込受付中。ラジオデイズ URL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話 011-3341-1130より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、伊藤博、大森美知子が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信しています。どうぞお夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

※ラジオ関西での放送は、4月1日の深夜24時半から午前1時放送分で終了いたします。
4月4日からは、インターネットFMで毎週日曜日の深夜23時から23時半まで放送開始いたします。

今後の放送予定（深夜のお客様）

- 4月4日 内田樹 #1（現代思想家）
- 11日 内田樹 #2（現代思想家）
- 18日 松田哲夫（編集者）
- 25日 柳家喬太郎（落語家）

「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載 <http://www.radiodays.jp>

今最もブックイング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

- 戦後落語論（三遊亭円丈 vs 本田久作）
- 戦後詩人論（高橋源一郎 vs 小池昌代）
- 戦後マンガ家論（養老孟司 vs 内田樹）



そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱいです。ラジオデイズサイトようこそ!

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。

弥生の催しふたつ

演芸研究家の大友浩さんプロデュースの第

二回オリンパスシンクろるきわめつけ落語会（三月十八日）は、この人のこの一席という

趣向で春風亭小柳枝、八光亭春輔、立川談四

楼のベテラン三師匠の競演。噺家さんと大友

さんのトークも楽しみのひとつ。開口一番は

春風亭ぼっぼさんで「手紙無筆」。なんでも

うまい前座さんです。まずは、談四樓師匠。

ネタは講談でお馴染み名人噺の名作「浜野矩

随」。名人の父親を持った彫物師・矩随。父

親の名を汚さぬよう仕事を替えたらと店主に

言われ死のうと思う。母親に死ぬ気で観音様

を彫ってくれと頼まれ心血を注ぐが……。凄

みの利いた談四樓師匠の芸が光る一席でした。

続く小柳枝師匠は、お馴染み人情噺の傑作「井

戸の茶碗」。浪人父娘と若侍、取り持つ屑屋、

善人ばかりが出てくるメルヘンのような噺を、

今や貴重になった生粋の江戸弁で語る。さら

りと粋に演じて爽やかな風を残してくれまし

米粒写経が登場。開口一番は、おなじみ春風

亭ぼっぼさんで「やかん」。講談調の語りは

前座とは思えぬわざもの。さて本日の主役、

談笑師匠、WBC野球ネタをマクラに始まったのは古典「天災」のほが、ただでは終わ

らぬ談笑流。過激過ぎる傍若無人八五郎に

観客も呆気にとられて、衝撃的な独演会が始

まりました。続いて登場は米粒写経。あのプ

ルースブラザーズや青空球児・好児を彷彿と

させる凸凹コンビですが、東京しゃべくり漫

才の伝統をふまえた若手成長株です。ネタは

「ただいま婚活中」。空前絶後・抱腹絶倒・時

代錯誤のマシガントークに観客は笑い疲れ

の様相。仲入後は談笑師匠。いきなり夢見心

地の男が女房に起こされるシーンから始まり

芝浜か? と思いきや、談笑新作の裏の代表

作「シャブ浜」。けっして放送では聴けない

社会派問題作であり、地獄の中から天国へと

転換する珠玉の人情噺でもあります。ぶちの

「オリンパスシンクろ寄席」携帯用特別コンテンツ

シンクろ寄席特別コンテンツでは、シンクろ寄席やラジオデイズ落語会にご出演いただいた演者さんの情報や音源、最新のラジオデイズイベント情報が携帯電話からお楽しみいただけます。



バーコードで簡単アクセス!
左のバーコードを携帯のカメラで読み込み、無料画像認識アプリ「sync ★R」(シンクろ)をダウンロード。

空メールを送信してアクセス!
a@gwmj.jp
ダウンロード先URLが記載されたメールが返信されてきます。

次にアプリから「sync ★R」(シンクろ)を起動、月刊ラジオデイズ各号の1ページ目『この人の声が聴きたい』の丸抜き写真、2、3ページの落語会情報内にある噺家さんプロフィール写真を撮影して保存・送信すればOK。

※各写真の全体が入るように、ピントの合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。

シンクろ (Sync ★R) とは?
オリンパス株式会社の開発による先進の画像認識技術を活用したカメラ付携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

待ち望んでいた桜が花開き淡いピンクに包まれた新宿御苑は、多くの人が訪れ、一段と賑やかになっています。木々の若葉同様、道ゆく新入生や新入社員も輝いています。

さて、ラジオデイズでも新しいコンテンツ「オーディオブック」が登場。ベストセラーを音声で聴く新しい本の読み方です。通勤時にも疲れてのんびりしたい夜にもぴったり。多忙な新生活のスタートにおすすめです。

